

本との 出会いを 楽しむ

第 24 回

先輩の本棚

「世界との向き合い方」

永嶋 孝紀

2018 年弘前大学理工学部卒

2020 年弘前大学大学院理工学研究科卒

半導体メーカー勤務



人は何を知り得るのか、という命題は古くより議論されてきた。考えてみると学問そのものが、学ぶ本人の意思から独立して、この命題に対する活動であるように思える。今では見る影もないが、自分もこの命題の答を知るという意思を持って物理学を専攻した。

物理学が究極的に示そうとするもの、それは世界の真理に他ならないと昔は思い込んでいた。「無」とはなんなのか、「私」という存在はなぜ今ここに存在するのか、という疑問に対して根拠ある解を得られるのではないかと思いついていた。受験生の頃にクラウド著「宇宙が始まる前には何があったのか」を読み、宇宙は無から生じなければならないという内容に非常に惹かれた事を覚えている。思い返せばこの本を読み、自分が抱いていた疑問について研究できるのではないかという期待を物理学に持ったのだった。

結局この問いに対する答は得られなかったが、物理学を専攻した事に後悔はない。しかし、今では物理学が世界の真理を解き明かすなどとは思ってはいない。科学が解き明かすのは人が思考できる範囲での事だ。思考の外側、「無」や魂の定義すら曖昧な現状ではおそらく今後も無理だろう。そんな中で興味を持ったのがカントの「純粹理性批判」やウイットゲンシュタインの「論理哲学論考」である。まだ勉強中なので深い言及は避けるが、これらの人の思考を限界付けるといった内容が非常に興味深かった。今後も世界の真理なんか分からないのだろうが、どのような態度で世界と向き合うか、これこそが重要なのだと思う。

散りゆく桜の樹の前にして、私は

何を知り得るのだろうか。親木の在処、花卉の総数、今まで何度開花し、散ったのか。たった一つの桜の樹を取っても、私には知り得ないことが無数にある。しかし、その樹に触れたときの感触や、手に取った花卉の色や形、散りゆく瞬間の風景。私にしか知り得ない「神秘」に世界は満ちている。

「論理哲学論考」命題 6.4.5 より、「限界づけられた全体として世界を感じる、ここに神秘がある」。見方によって世界は様々な側面を見せる。本当に重要なことは私が何を見たか、感じたか。今ではそんな気がしている。

最後に、野矢茂樹氏の著書「語りえぬものを語る」より一文を借りて、この拙文を締め括らせて頂きたい。

「科学が世界を語り尽くさないのは科学の限界のゆえではない。そもそも世界は語り尽くせないのである。世界は、私を驚かしうる。実在は、自然科学を含め、言語によって語り出されたあらゆる理念的世界からずれていく。実在とは、語られた世界からたえずはみ出していく力に他ならない。その力を自分自身に、人間の行為に見てとるとき、そこにこそ、「自由の物語」を語り出す余地も生まれる」
(ながしま たかのり)

本館所蔵

「論理哲学論考」 岩波文庫 L.Wittgenstein 著 野矢茂樹訳	080 3 4049
和図書第 1 書庫 (2F~5F)	
「語りえぬものを語る」 野矢茂樹著	104 N97k
開架図書 (本館 2F)	
「宇宙が始まる前には何が あったのか」 L.Kraus 著 青木薫訳	443.9 Kr2u
開架図書 (本館 2F)	